

『助産婦』(vol.54,no.3,2000) p.33~36

施設化以前の自宅分娩と現代の自宅分娩の連続性と非連続性

白井千晶

早稲田大学大学院文学研究科社会学専攻
神奈川県立看護専門学校非常勤講師

1 はじめに

自宅分娩が近年、各界(マスコミ、妊産婦、医師、助産婦など)で注目を集めている。だが、妊産婦のニーズはなにか、搬送システムの形成の方法、助産婦のチーム形成の仕方、自宅出産に特有の技や知恵はなにか、その習得や伝承はどのようにおこなわれるべきか、といった具体的な問題については、個々の助産婦、個々のケースによって施行錯誤を重ねて模索しているのではないだろうか。

そんな時、「あの頃」の話をするベテラン助産婦もあるだろう(本誌に掲載された例も枚挙に暇がない)。「あの頃」とは、ベテラン助産婦がお産に沐浴に、かばんを持って歩いた、自宅分娩主流のあの時代である。「あの」が具体的にいつかは、地方や地域によって異なるが、おおむね昭和30年ごろまでと考えればよいだろう。

「あの頃」を語る助産婦から学ぶものと、反対に「時代が違う」と考えるもののがそれぞれ何か、腑分けしかねる助産婦もいるかもしれない。一方で、ベテラン助産婦の中には、自宅分娩の「知」が継承されていないと嘆かわしく思うものもあるかもしれない。

それを明確にするためには、自宅分娩がおかれている(自宅分娩が90%をこえていた)「あの頃」の社会と、自宅分娩が0.1%(だが数以上に注目を集めている)の「いま」の社会の共通点と相違点を明らかにしなければならない。というのは、「あの頃」と「いま」の自宅分娩の種々の違いは、個々の助産婦の経験や技術・パーソナリティに帰せられるも

のではなく、自宅分娩がおかれている社会の仕組みに帰せられるものだからである。だから、本稿は、個々の自宅分娩、個々の出張助産婦を比較して、あの頃もいまま自宅分娩は個々のお産・家族の個別性や主体性に重点がおかれるとか、いやいや昔の自宅分娩とは大きく違う、世代継承がおこなわれていないからダメなんだ、といった議論はの場合あまり有益ではない。したがって、本稿では、その自宅分娩がおかれている社会の仕組みの共通点と相違点に焦点を当てたい。なかでも、今回は「医療化」をキーワードにみてみようと思う。それは現代社会で自宅分娩が注目される理由、つまり「なぜいま自宅分娩なのか」「自宅分娩のニーズはなにか」を浮き彫りにする一助となるであろう。

2 「あの頃」と「いま」の共通点~連続性

出産に関連した、「あの頃」と「いま」の社会の共通点といえば、ともに社会の「医療化」が進行しつつあるということであろう。

たとえば、石川県能登・浦上村の竹島みい(明治39年生)は、トリアゲバアサンのいた地で産婆を開業してから3年で、3つの「大改造」をした。それは座産を寝た姿勢で出産する仰臥位にすること、出産の前に診察を受ける習慣をつけること、人々に衛生観念をもたせること、である(西川、1997、p.144)。これは、西洋医学を学び資格を取得した「近代産婆」が抑圧的に「大改造」を押しつけたのではなく、その社会に「医療化」を受け入れる土壌がすでにできあがっていたと見るべきである。

とかく「あの頃」の自宅分娩については、経験と勘によるのではないかといった「非医学的」「非科学的なステレオタイプを私たちはもっている。だが、私たちが知っている時代の自宅分娩は、解剖学、産科学などの医学・周辺学問や医療技術の発達、および社会的な保健衛生知識の普及によって、「医療の程度

が高ければ高いほど評価される」という意味で、「医療化」を進行させており、近代産婆は「医療専門職」として社会に認知されている点で、それ以前の産婆とは異なっており、今日の助産婦との共通点をもっている。

現代社会でもまた、周知の通り、医療化は進行している。生殖にかかわる医療に限定してみても、遺伝子工学の応用、生殖補助医療技術（体外受精・顕微受精）、出生前診断、医薬を使用した分娩日時や分娩経過のコントロールなど、医療技術の進歩に伴って医学的予防と管理のルーティーン化が徹底したのである。

3 「あの頃」と「いま」の相違点～非連続性

「あの頃」も「いま」も医療化が進行しているという共通点があるが、「いま」の自宅分娩は、医療化に対する異議申し立ての一つとして登場したという点で、社会における自宅分娩の位置は「あの頃」と大きく異なっている。

いま現在の出産をめぐる状況は、「マクドナルド化」と言い表すことができる。マクドナルド化とは、効率性、予測可能性、計算可能性、制御、の4つを最大化するシステムへと社会が変化することである。出産に当てはめると、たとえば陣痛誘発剤や陣痛促進剤は、しばしば「予定したとおり」に「マニュアル通りに」生まれるために使用される。「あとどれくらいで生まれるか」を予測することも可能となるし、また分娩を「コントロールする」ことも可能となる。

そしてそれはしばしば出産の「脱人間化」をもたらす。出産にかかわる医師、助産婦、看護婦、妊産婦、その他の人びとの手を放れて、システムが自律的に動き始めるのである。

現代の自宅分娩は、そういったマクドナルド化された出産に対する一つのアンチテーゼを提起している。「病院のスタッフによる、人間味のない、手抜き措置」「医者の便宜のた

めに引き起こされる無駄な時間」（ジョージ・リッツア、1999、p.268）や病院や医師のための無駄な処置を回避するために、つまり現代の出産の「脱人間化」と「合理化」に対するクレーム（異議申し立て、つまり脱マクドナルド化の要求）として自宅分娩が選択されているというのが一つの理由である。

だが、その方向性は「あの頃」への「回帰」ではないことに注意しなければならない。出産に関する医学的な技術・知識の進歩による違い（たとえば、妊婦の自宅での健診にも可能なエコーの技術など）は当然のことながら、社会における「出産の位置」が大きく異なっているからである。たとえば、「あの頃」は産婆・助産婦は名付け親になったりお七夜に主賓として招かれたり、また自宅分娩には近隣者や親戚などが加わったりした。つまり、出産は「妊産婦の出来事、家族の出来事」というより、「コミュニティの出来事」であり、助産婦も妊産婦もコミュニティでの役割をもっていたのである。

しかし現代では、そのようなコミュニティ・地域社会はほとんどその機能を失い、出産はコミュニティの出来事ではなく、「家族の出来事」へと変化した。そのため、たとえば家族には出産にぜひとも立ち会ってほしいが、近所の人がお湯を沸かしに、あるいは生まれたかと冷やかに来てもらっては困る、といった「プライベートな出産」が登場するのである。ビデオは撮りたい、でも他人には見せたくない、というエピソードがその象徴である。

もう一つの側面として、出産に関する情報が大量に流通するようになり、妊産婦は産む土地も産む場所も自由に選択するようになったということがあげられる。これにより、妊産婦と助産婦は、「あの頃」のような地縁によるコミュニティへの「所属」という結びつきではなく、自発的な、緩やかな、選択的なネットワークへの「参加」という結びつきをも

つ。そのため、妊産婦は助産婦に対し、マタニティ・サークル、ママ・サークルなど、ネットワークの提供者という役割も期待するのである。

また、「あの頃」とは異なり、選択の結果としての自宅分娩であるから、個々人の選択理由が達成されること（好きなだけ初乳をあげたい、好きな場所で産みたい、など）が重視される。

4 連続性と非連続性のねじれ

このように、自宅分娩を取り巻く社会の構造や、自宅出産のニーズは「あの頃」と「いま」では異なっている。それでも、「お産婆さんのような自宅分娩」への回帰現象として語られるというのは、一つには、実際に「知の継承」がおこなわれている側面があるからであろう。だがもう一つ、社会の医療化はますますその程度が高まっており、自宅分娩もまた、医療化による恩恵を放棄しているわけではないことが重要である（たとえば、出張助産婦のデータではないが、一つの指標として、有床助産所のドブラー保有率8割、超音波診断装置保有率6割）。それでも「あの頃への回帰」が語られるのは、自宅分娩の「伝統性」を主張することで正当性が得られるからであろう。

また、「あの頃」の自宅分娩もまた医療化を進行させていたのに、現代の視点で語られるときに「非医療的」であるかのように定義されるのは、マクドナルド化への異議申し立てという現代の自宅分娩の存立基盤ゆえであると考えられる。

つまり、昭和30年代までの自宅分娩を振り返るとき、また現代の自宅分娩を語るとき、医療化か非（ないし脱）医療化か、曖昧だったり矛盾した言説が引き起こされるのは、医療化の基盤上で脱医療化を目指すという、現代の自宅分娩の特異な状況に起因するのだといえる。以上のように歴史に照らして現代の

自宅分娩を考えると、自宅分娩のニーズの所在やこれからの方向性、依るべき基盤が少しでも明らかになるのではないだろうか。

そのためには、現在自宅分娩に携わる人びと（助産婦・医師・妊産婦・その他の人びと）が、施設化以前の分娩の評価（医療化か未医療化か）をいま一度明らかにし、また現代の自宅分娩の評価（医療化か脱医療化か）を明確に提示しなければならない。

そうしなければ、現代の自宅分娩を医療的と見なした上で、施設化以前の自宅分娩を未医療的だと一線を画したり、現代の自宅分娩を脱医療的と見なした上で、施設化以前の自宅分娩との連続性を強調して正当性を訴えたりといった、矛盾した態度になってしまい、現在主流を占めるマクドナルド的な分娩になじんだものに対してアピールすることができなくなってしまうであろう。

参考文献

- 西川麦子、1997年、『ある近代産婆の物語 - 能登・竹島みいの語りより』桂書房
- リッツア・ジョージ、1999年、『マクドナルド化する社会』正岡寛司監訳、早稲田大学出版部
- 白井千晶、1998年、「出産、助産婦、産婦の社会的考察に向けて - 第2回産み場所のいまむかし」『助産婦』vol.52.no.2、pp.38~40、日本助産婦会
- 白井千晶、1999年、「1998年全国有床助産所調査結果報告」『助産婦』vol.53.no.1、pp.40~45、日本助産婦会
- 白井千晶、1999年、「自宅出産から施設出産への趨勢的变化 戦後日本の場合」『社会学年誌』40号、pp.125~139、早稲田社会学会

参考ホームページ

白井千晶「出産の社会史～助産婦さんに聞くお産のいまむかし」

<http://www.littera.waseda.ac.jp/appendix/shaken/shira.htm>